

私が暮らす団地の隣保では、毎年初めに親睦会を催すのが慣わしになっています。自治会に所属する六軒ほどのグループで、昨年度は我が家が班長の当番だったので、今年初めに行った親睦会では幹事を務めました。開会の挨拶で何を喋ったかはあまり記憶に無いのですが「近頃は妙な病気が流行っているようなので、皆様くれぐれもお気を付けてください」と結んだことだけはよく覚えています。それが二月半ばのことでした。

当時コロナは新型肺炎と呼称され、人工的なウイルスによる陰謀説等も相まって不穏な空気が流れ始めている時期でした。ですが、多くの人が中にはそれほど危機感はない様子で、私自身も過去のSARSやMARSのように限定的に発生して早々に収束するであろうと楽観的に考えていました。

三月に入り国内でも感染が広がりがつつあるなか、それでも二ヶ月もすれば落ち着くだろうと考え、五月の連休に神戸に住む娘夫婦の元へ二歳になる孫の顔を見に行く予定を立てたのです。しかし、四月に松江市内でクラスターが発生したことにより状況は一変し、この目論見は潰れてしまいました。

それどころか、毎年ゴールデンウィークには県外からの多くの観光客で賑わう松江城周辺が、決して大袈裟ではなくゴーストタウンの様相を呈していたのは本当に驚きでした。クラスターが発生したのは繁華街にある飲食店であったために、多くの居酒屋やレストランなどが休業或いは業務縮小に追い込まれ、結局再開できずに閉店の憂き目にあつたところもあります。その他、我々の目に触れないところでも多くの困難があつたに違いありません。

半年が経ち、政府のGOTOなんとかいう不公平で場当たりのなキャンペーンのお陰で観光客も増えて、繁華街も賑わいを取り戻しつつあります。島根でも飲食チェーンの販売が開始されたのですが、予約するには年寄りにとつて苦行ともいえるネット経由のチャチャマした手続きを経た上で、ローソン店頭のコピーとかいう怪しげな機械と格闘せねば手に入りません。観光にしても県外からお越し頂くのは経済が潤って良いとしても、田舎から都会への旅行はまだ怖くて行けそうにもないという体たらく。

残念ながら、可愛い孫に会いに行けるのは当分お預けのようです。



専業ババ奮闘記(その2) 29

## 木幡智恵美

### 産前休暇 (1)

かつての虫博士こと、長男に「一二三三三おめでとう(十一月二十二日、三十三歳の誕生日、おめでとう)」のメールを送った日の夕方、寛大と実歩を保育所に迎えに行き、我が家に連れて帰った。夕飯を食べさせてから、居間で遊ばせていると、「お世話になりました」と娘の声。台所のドアを開けるなり、「明日から産休だから、あちこちにあいさつ回りして、疲れたわ」。大きなお腹を押さえながらいつものようにまくしたてる。

「これから少しのんびりできるね」と言うと、「いやあ、アパートの片づけをぼちぼちしないといけんし、そうのんびりもしたらんに」と返す。

実は、娘たち一家は家を新築中で、年末に完成する予定なのだ。一か月後には引越して、大きなお腹を抱えながらアパートの片づけをし、少しずつ荷造りなどを始めなければならぬ。第三子の出産予定日が、年明けの十九日。寛大も実歩も予定日より十日前後早く生まれている。今回も予定より早く生まれ、新居に入ると日よりも前に生まれたらどうしよう、引越しの日に産気づいたらどうしようとかから心配している。「実歩の七五三の写真撮りも、一月七日でさあ」。何もかもが年末から年を明けた頃にかけて予定されているようだ。

「重たいものを持つたらいけんよ。アパートの片づけも手伝うから、いつでも呼んでよ」と言うと、「大きい荷物は引越し業者がしてくれるけん、小さいものをまとめるだけだけん。少しずつやっていけば大丈夫だと思うけど、高いところの物を取ったり、重たいものを運んだりするときは頼むわ」と言って、出っ張った腹を引きずるようにして二人を連れて帰っていった。

その二日後、散歩ついでに買い物に行くと、「ばば」の声。寛大、実歩がお父ちゃん、お母ちゃんと一緒に買い物に来ていた。寛大と実歩は私と店内を回り、娘たち夫婦は仲良く買い物をしていった。これからが大変だとまくしたてていた割に、ゆったり構えているではないか。そういえば、我が子が小さい頃、夫も一緒に買い物をしたことはあつたつけないか。そういながら、孫二人について店内を歩いた。

30代フリーター やあ、ジイさん。大阪都構想が住民投票で否決された。

年金生活者 賛成票を投じた大阪市民のひとりとして残念に思う一方で、構想の説明の粗さに大阪維新の会の「おごり」を嗅ぎ取った民意の鋭さを感じないわけにはいかない。

維新の会の「おごり」は2019年の大阪府知事・大阪市長ダブル選での圧勝のあとから始まったと思われる。

同時に行われた府議会と大阪市議会の議員選挙でも議席を伸ばし、府議会では過半数を占めた。この数の力を背景に、維新は公明の現職議員がいる関西の衆院6選挙区に対抗馬を立てると同党を脅し、都構想賛成に回らせた。

30代 これで住民投票は勝てるかと踏んだんだろうな。

年金 その気のゆるみが今回あらわになった。朝日新聞は構想の旗振り役の大阪市長・大阪維新の会代表の松井一郎らを「オンラインを含めても住民説明会を前回より大幅に減らし、反対派の主張を『デマ』と決めつけた」と批

判し、「説明を尽くさない姿勢が、失速を招いた」と指摘した（大阪社会部長・羽根和人、11月2日朝刊）。

説明会を減らしたばかりか、反対派の主張を「デマ」と決めつけたのは、自党や役所の都合を優先したうえに、自分たちの視線を住民よりも他党の方に向けていたことを示している。なめられていたのではないかと感じた住民も少なくないはずだ。

30代 維新の創業者の橋下徹が自認するように、橋下も松井もともとガラが悪いからな。

年金 政党や政権や役所から軽んじられることは、今の時代の人びとが最も嫌う政治的な振る舞いのひとつだ。それをよく知る大阪維新の会は、「民意」を第一にすることを基本姿勢とすることの有権者の支持を広げてきた。

それはだれにでもいい顔をすることではなく、多数派の「民意」に従うことを意味した。だから、多数決原理に常に忠実であり、そのため、必ず反対派との対決を招いた。対決すること、戦

うことは、相手を見下さないことでもある。維新は上から目線になることをそれによつてあたり限り免れてきた。

大阪市を廃止して特別区に4分割する大阪都構想は、住民に最も身近な行政を、大きな権限を持つ政令指定都市から、他の市町村並みの権限しか持たない自治体に置き換えることを意味する。特別区の権力は今の大阪市より弱くなるので、そのぶん職員たちは住民に対して上から目線にならないで済む。それは「民意」第一の維新の基本姿勢にかなうものであり、私が都構想に賛成した理由もそこにある。

維新のそうした住民に対する「腰の低さ」を評価してきた大阪市民は今回の住民投票で同党の見せた説明の粗さに、維新らしくない上から目線を感じたのではないか。

30代 奇策のダブル選を仕掛け、公明党を脅したことも市民に不信を抱かせたのではないか。

年金 私はそうした奇策や脅しを必ずしも悪いこととは考えない。だが、そ

れらはいくまでも都構想実現のための

手段であつて、それ自体が住民に利益をもたらすものではない。それにかまけ過ぎると、住民は自分たちが軽く見られていると感じる。だから、それを埋め合わせるために、維新は前回に倍するほどの丁寧な説明をしなければならなかったはずだ。

連日、街路に立つて都構想反対を熱く語った山本太郎のような、重心を低くした運動を維新が続けていけば、投票結果は変わっていたかもしれない。

大阪府知事・大阪維新の会代表代行の吉村洋文は「反対派の思い、熱量が強かったんだと思います」と、敗北後の記者会見で語った。それは維新がおごりを最後まで乗り超えられなかったことを意味する。

30代 反対多数になった理由はそれだけか。

年金 反対票を投じた市民に最も広く共有されていたのは、大阪市が廃止されることへの恐れだったと推察される。賛成・反対両派が主張する都構想

のメリット、デメリットは、専門家でも確かめるのが難しい。だが、構想によつて大阪市がなくなることだけは確

実であり、その耐えがたさが反対票を増やした最大の要因と考えることができる。

30代 大阪市がなくなっても、その日から大阪の街がなくなるわけでもなければ、行政サービスがストップするわ

けでもない。

年金 大阪市の廃止とは現実の「大阪」がなくなることではなく、「大阪市」という名前がなくなることだ。だが、人の心には名前の消滅が現実の消滅に劣らずこたえることがある。大阪市の名がなくなるとは、住民にとつて「大阪市民」という一種の「肩書」を剥奪されることを意味する。この肩書は伝統と先進性を備えた大都市の一員であることを示すものであり、住民にとつては自尊心の支えになっている。他の市町村に対してひそかに優越感を抱くこともできる。「北区民」や「中央区民」ではそれができない。

投票結果を伝える朝日新聞は、「反対派の主張も具体性に乏しく力が弱いと感じ」ながら「大阪市が消えてなくなることは許せない」と反対票を投じた城東区の主婦（76）の話を紹介していた（11月2日朝刊）。それは、実より「大阪市」という名を取ることを選んだ多くの市民の気持ちを表している。

ニュース日記 760  
中村 礼治

## 実より名を取った 大阪市民